

帯

と西陣織の歴史

西陣織（絹織物）の起源

絹織物はいつ頃から？

西陣織（絹織物）は、5、6世紀頃、大陸からの渡来人である秦氏が現在の京都・太秦（うずまさ）に定住し、新しい農耕技術とともに、養蚕業と絹織の技術を伝えたことが始まりとされています。桓武天皇の平安京遷都の大きな背景に秦氏の経済力もあり、宮廷の絹織物もこの伝統の上に花開きました。

太秦（うずまさ）の由来

映画村で有名な太秦は秦氏の定住地なのでそう呼ばれたといわれていますが、朝廷に献上した絹織物が「うずたかく積まれたこと」に由来するともいわれています。太秦には秦氏ゆかりの神社「蚕の社(かいこのやしろ)」があります。織物の祖神を祀る蚕養神社があり、そこから蚕の社と呼ばれています。

織屋は役人でした！

朝廷は織物を掌る役所「織部司（おりべのつかさ）」を設置し皇族・貴族用の絹織物の技術者を奨励し、盛んに綾錦などの高級な織物を作りだしました。平安中期以降、貴族社会の律令制度が崩れるにつれ、織手たちは自ら織物業を営むことになりました。特に大舎人（おおとねり）町に集まり住んだことから「大舎人の綾」「大宮の絹」と呼ばれる美しい織物を生産していました。

帯の歴史

帯は一本の「ひも」から？

衣服の起源は紐衣（腰に巻いた1本の「ひも」）といわれています。

身体を中心である腰に「ひも」を巻いて悪霊を入れず、生霊が身体から遊離しないようにという呪術的な要素があったとおもわれます。

次に「ひも」をより美しくしたいという欲求が生まれ、文様をつけたり、長くして結びを工夫したりという装飾性が生まれました。